

研究は〇〇のようなもの？

疾患酵素学研究センター・免疫病態研究部門

松本 満

これまで多くの研究者の話聞く中で、「研究はマラソンのようなもの」、あるいは「研究は山登りのようなもの」という言葉を耳にしてきました。その話を聞くたびに、マラソンも山登りもしたことのない私ですが、何となくその意味するところを分ったような気でおりました。これらのたとえば、目標達成のための努力や忍耐の必要性を説いたものだと思いますが、ある時ふと、本当に研究がマラソンや山登りのようなものかどうかを、それをやったことのない自分が納得するのも妙なものだと思うようになりました。ましてや学生や若い研究者に、「研究がマラソンや山登りのようなもの」という言葉を、それを経験したことのない自分が口にするのはとても不自然なことだと感じるようになりました。

研究は本当にマラソンのようなものか？この疑問を解くには、実際に自分がマラソンを経験してみるしかないと思い、今年初めに県南で開催されたマラソン大会に参加してみることにしました。いきなりフルマラソンを走る訳にはいきませんので、週末に少しずつ走るようにして、本番前にはハーフ程度の距離も試しに走ってみて当日に備えました。ピストルの合図とともに走り始め、前半はそれなりのペースで走れたものの、折り返し地点でトイレに行くと尿が少しピンク色を帯びていることに気付きました。実はかつて10キロ程度を走るようになった頃、ランニング後に血尿が出て病院を受診したことがあります。尿路結石、あるいはランニングによる溶血との診断を受け、特に重大な問題ではないとのことでした。ただ、今回はまだ半分しか走っていない時点で起きたため、はたして最後まで走って良いものかどうか不安になってきました。事実、その後はトイレに行く度に徐々に尿の赤みが増すので、このまま無理をして走っていて救急車のお世話になるようなことになってはマズいと思い、途中棄権すべきかを迷い始めました。30キロ地点では身体への負担を減らそうと少し歩いたりもしましたが、35キロ付近で5時間のペースメーカーランナーに抜かれると、5時間は越したくないという当初の目標から再び走り出しました。ゴール近くになるとさすがに苦しくて、やがてフィニッシュを迎える残りわず

かな道のりを名残惜しみつつ走るといった情緒的なことなど全くなく、あえぐようにゴールすることができました。完走直後の感想は、「もう二度と走りたくない」でした。

さて、この体験の中に研究に通じるものがあつたでしょうか？こうして実際にマラソンを走ってみて、本当に研究はマラソンと同じようなものかと聞かれると、むしろ走る前の方が、何となくそれらしい気がしていたように思います。

似たような動機から、3年前、富士山に登りました。当たり前のことですが、富士山は頂上まで、登っても登っても登りばかりで、他の山のように時おり平地や下りが現れることはありません。途中の景色も単調なものです。でも、ようやく雪深い山頂に立つと、そこにはわずか数人の登山者がいるのみで、眼下に広がる景色は素晴らしいの一言に尽きるものでした。翌日は八ヶ岳にも登り、雪山登山を堪能することができました。さて、ふたたび研究は山登りのようなものでしょうか？山登りは楽しいけれど、研究が楽しいということを伝えるためだけなら、何も登山を持ち出さなくても、誰にも分かるもっと楽しいことを引き合いに出せばいいように思います（ただ、研究が夏休みのようなものだと言うと変な誤解を生むかもしれませんので、それはよした方が良さそうです）。登山へのたとえば、ツライところを我慢して頑張れば、素晴らしい成果や達成感が得られるということだと思のですが、この時もどちらかということと山登りを始める前の方が何となく分つたような気がしていたと思います。ちなみに富士山に登って以来、それで満足したのか、その後はあまり山に登らなくなってしまいました。多少の成果に満足して止めてしまうようでは、逆に登山を研究のたとえにするのはふさわしくないようにも思います。

ひるがえって、私は今のところ研究をうまく表現できるような良いたとえを知りません。自分でも納得できるようなたとえがあれば、みんなにも自信を持って語れると思うのですが。。もしもどなたか、研究は〇〇のようなものだと教えてくだされば、私は必ず試してみますので、どうかよろしくお願いします。ただし、「研究はギャンブルのようなものだ」というたとえは結構です。それはもう、学生時代に十分過ぎるほど経験して知っていますから。